

山形県山形市方言



山形県方言区画図

【山形県の方言区画】山形県は宮城県との県境に奥羽山脈が位置し、他の県境もさまざまな山地が自然境界をなしている。県内は庄内・最上・村山・置賜の4地方に分かれ、方言や生活習慣も異なる。区画図は山形県方言研究会編（1972）によるもので、市町村境界とは異なる境界線が引かれている。最上地方と村山地方の境界線は、現象によって入り組んでいるとする先行研究が多く、点線になっている。

庄内地方は庄内平野を中心とした地域で、内陸に比べて安定した政権が続いた地方である。江戸時代には北前船による交易・交流によって、庄内には京都をはじめ、各地の文化が取り入れられ、独自の発展を遂げた。このため、庄内地方と内陸地方には、全く別の文化圏という意識が根強く残っている。内陸地方は、それぞれ新庄盆地（最上）・山形盆地（村山）・米沢盆地（置賜）を中心とした地形である。境界意識はあるものの、庄内と内陸ほどの大きな違いや対立意識があるわけではない。

言語面でも、庄内方言と最上・村山・置賜の内陸方言では大きな違いが見られる。庄内地方と新庄市を含む最上地方の一部、置賜方言のごくわずかな地

域は東京式アクセントであるのに対し、内陸地方の大部分は無型アクセントである。また、〈捨てる〉ことを内陸地方では「ナゲル」または「ブ（ン）ナゲル」と言うのに対し、庄内地方では「ウダル」と言う。また、〈驚いた〉ことを内陸地方では主に「タマゲダ」と言うが、庄内地方では「オボゲダ」と言う。

【山形市方言について】山形市方言は内陸方言のうち村山方言に位置する。村山地方の方言には、連母音の融合が高年層にも見られない。たとえば、形容詞「ナイ」に母音が融合したネアなどが存在せず、動詞否定形を作る「ナイ」の終止形（言い切り）のみに狭めのエ段音または広めのイ段音で発音される「ネ」が用いられる。最上地方には融合したネアが存在し、置賜地方ではネまたはニが使われている。

山形市は村山地方の東端に位置しており、現在は県庁所在地である。近世史を参照すると、城下町ではあったが城主は一定せず、江戸時代は直轄地であった。そのため、たとえば村山方言は無型アクセント・無敬語であったにもかかわらず、市中心部の香澄町（現在の山形駅東口前の一帯）に有型アクセントや敬語など、言語的に特殊な地域が存在したことが知られている（平山 1944）。

村山地方の方言の中でも、現代の山形市方言は特に変化が進みつつある方言と思われる。例えば、周辺地域には過去の助動詞相当の形式タッタや原因・理由表現のサカイ類があるが、現代の山形市方言では聞かれない。また、終助詞やイントネーションの種類が多く、他の地域では接尾辞が担う文法的機能の多くをこれらが担っていると見られる。

【表記について】次の基準によるが、文献からの引用例文では原典の表記にしたがう。①「イ」と「エ」は互いの中間音で発音されるが、基本的に、イ寄りの発音は「イ」、エ寄りの発音は「エ」で表記する。②「シ／ス」を「ス」/su/、「ジ／ズ」を「ズ」/zu/、「チ／ツ」を「ツ」/cu/で表す。③有声母音に挟まれたカ・タ行音は濁音化するが、この現象による濁音の表記は、活用表中に限って行わない。④ガ行鼻濁音は、カ°・キ°…のように表記する。ザ・ダ・バ

行にも入り渡り鼻音が現れることがあるが、表記に反映しない。⑤「カクツケ」「サツシャイ」などの促音が省略あるいは短く発音されることがあるが、ここでは表記しておく。

【調査概要】本稿の記述は、昔話資料や先行研究などからの引用のほか、山形市方言の話者四名（1939年生・女性・沼木および上町、1942年生・男性・八日町、1954年生・女性・上町、1975年生・男性・南館および鳥居ヶ丘）に竹田と澤村が調査したものと、

澤村美幸（1980年生・久保田）の内省による。出典の情報がない例文は、作例を上の話者に確認したものである。昔話資料（用例出典の武田4～11）から、山形市の南に隣接する上山市榎下の話者による例文を、山形市話者に確認したうえで取り上げた場合がある。なお、話者の年代によってしばしば語形や用法が異なる場合があった。ここでは現代の山形市方言で最も一般的と思われる語形を取り上げる。

山形県山形市方言の活用表

《動詞》

		多段型 書く	一段型 見る	来る	する
終 止 類	断定非過去	カク	ミル	クル	スル
	断定過去	カイタ カクツケ カイタツケ カクカッタ	ミタ ミルツケ ミタツケ ミルカッタ	キタ クルツケ キタツケ クルカッタ	スタ スルツケ スタツケ スルカッタ
	命令	カケ	ミロ	コイ	スロ
	禁止	カクナ	ミンナ	クンナ	スンナ
	意志	カクベ	ミンベ ミッペ	クンベ クッペ	スンベ スッペ
	推量	カクベ	ミンベ ミッペ	クンベ クッペ	スンベ スッペ
接 続 類	連体非過去	カク	ミル	クル	スル
	連体過去	カイタ カイタツケ カクツケ	ミタ ミタツケ ミルツケ	キタ キタツケ クルツケ	スタ スタツケ スルツケ
	中止	カイト	ミテ	キテ	ステ
	仮定	カクト カイトラ カケバ	ミルト ミタラ ミレバ	クルト キタラ クレバ	スルト スタラ スレバ
	継起	カイタツキヤ カイトレバ	ミタツキヤ ミタレバ	キタツキヤ キタレバ	スタツキヤ スタレバ
派 生 類	否定	カカネ	ミネ	コネ	スネ
	丁寧	カクッス	ミルッス	クルッス	スルッス
	使役	カカセル	ミセル	コサセル	サセル
	受身	カカレル	ミラレル	コラレル	サレル
	自発	カカル	ミラル	コラル	スラル
	可能肯定	カクイ	ミルイ	クルイ	スルイ
	可能否定	カカンネ	ミランネ	コランネ	サンネ
	尊敬	(該当形 欠)	(該当形 欠)	ゴザル	(該当形 欠)
	継続	カイトル カイツタ	ミテル ミッタ	キテル キッタ	ステル スッタ
	希望	カクダイ	ミルダイ	クルダイ	スルダイ
	のだ	カクノダ カクナダ	ミルノダ ミルナダ	クルノダ クルナダ	スルノダ スルナダ
	なる	カククナル	ミルクナル	クルクナル	スルクナル

多段型動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書く kak·u	カイ-タ	kをiにする。「行く」ik·uはkをQ(促音)にし「イッ-タ」。
g	嗅ぐ kag·u	カイ-ダ	gをiにする。-タが-ダになる。
s	出す das·u	ダス-タ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。
t/c	立つ tac·u	タッ-タ	t/cをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin·u	スン-ダ	nをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ tob·u	トン-ダ	bをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
m	飲む nom·u	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
r	切る kir·u	キッ-タ	rをQ(促音)にする。
w/ø	買う ka(w)·u	カッ-タ	wをQ(促音)にする。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	親切 [スンセズ] (だ)	学生 [ガクセー] (だ)
終 止 類	断定非過去	アカイ	親切ダ	学生ダ
	断定過去	アカカッタ	親切ダッタ	学生ダッタ
		アカイッケ	親切ダッケ	学生ダッケ
		アカイカッタ	親切ダカッタ	
推量	アカイベ	親切ダベ	学生ダベ	
接 続 類	連体非過去	アカイ	親切ナ	《学生ノ》
	連体過去	アカカッタ	親切ダッタ	学生ダッタ
		アカイッケ	親切ダッケ	学生ダッケ
	中止	アカクテ	親切デ	学生デ
仮定	アカイト	親切ダト	学生ダト	
	アカインダラ	親切ダラ	学生ダラ	
	アカイカッタラ	親切ダッタラ	学生ダッタラ	
派 生 類	否定	アカクナイ	親切デナイ	学生デナイ
	なる	アカクナル	親切ニナル	学生ニナル
	丁寧	アカイッス	親切ダッス	学生ダッス
	のだ	アカイノダ	親切ナノダ	学生ナノダ
アカイナダ		親切ナダ	学生ナダ	

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

規則的な活用型として基幹多段型(以下「多段型」と基幹一段型(以下「一段型」)がある。おおよそ、多段型にはa類(「書く」・「居る」・「死ぬ」類)動詞、一段型にはb類(「見る」・「起きる」・「開ける」類)動詞が所属する。

多段型の基幹にはア・ウ・エ段の3形、および、音便形がある。「カク」(書く)の場合、カカ・ネ

(kak·a-ne)、カク(kak·u)、カケ(kak·e)、カイ-タ(kai-ta; さらに有声化して カイダ kaida)など。また、語幹末子音には、k(カ行)、g(ガ行)、s(サ行)、t(タ行)、n(ナ行)、b(バ行)、m(マ行)、r(ラ行)、w(ワ行)がある。

一段型には、ミ-ル(mi-ru)、オキ-ル(oki-ru)など基幹がイ段の動詞と、ネ-ル(ne-ru)、アケ-ル(ake-ru)など基幹がエ段の動詞がある。一段型の動詞は、「ミル」を例にすると、断定非過去形ミ-ル(mi-ru)、仮

定形ミ-レバ (mi-reba)、受身形ミ-ラレル (mi-rareru)、自発形ミ-ラル (mi-raru)、可能否定形ミランネ (mi-raNne) で r で始まる接辞が付き、多段型の r 語幹動詞に対応した形となる。

不規則な活用をする動詞に「クル」(来る)と「スル」(為る)がある。ともに一段型に近い活用をするが、「クル」は、キ-タ (k-i-ta)、ク-ル (k-u-ru)、コイ (k-o-i) などのように、基幹が「キ」「ク」「コ」の3段に、「スル」は、サ-レル (s-a-reru)、ス-タ (s-u-ta)、ス-ル (s-u-ru) などのように、基幹が「サ」「ス」の2段にわたる。なお、「スル」の基幹「ス」にはイ段「シ」に由来するものが混じる。共通語や他の方言では接尾辞によって表される文法的意味が、断定形に助詞などが付くことにより表されることが多い。

(2)各活用形の特徴

〈断定非過去形〉

断定非過去形は連体非過去形と同形で、「書く」は基幹ウ段形の「カク」、「見る」「来る」「する」は基幹に「ル」を付けた「ミル」「クル」「スル」となる。ほかの語が続く場合、語末のルは促音化することがある。

- ・コッチノ ペンバ ツガッテ カグ。(こっちのペンを使って書く。)
- ・キョーワ エーカ° バ ミル。(今日は映画を見る。)
- ・アスタワ マコ° カ° クル。(明日は孫が来る。)
- ・頭をぼーゾコにする。。(頭を坊主にする。)(辞典・「ぼーゾコ」)

断定非過去形には、くだけた場面で意志を表す用法がある。ただし、終止形の語末をやや長呼し、例えば3拍の場合は高低高のイントネーションをともなって使用される。

- ・ソノ テカ° ミワ オレカ° カグー。(その手紙は俺が書く。)
- ・ソノ スンブン スマワネデ ケロ。 オレカ° コレガラ ミルー。(その新聞はしまわないでくれ。俺がこれから見る。)
- ・[母が子に言い聞かせる] ダイジョブ ダイジョブ、オカーチャン スグ モドッテ クル ニ。(大丈夫、大丈夫、お母さんはすぐに戻

って来る。)

- ・ソノ スゴドワ オレガ スルー。(その仕事は俺がする。)

〈断定過去形〉

断定過去形には「タ」「ツケ」「タツケ」および「カッタ」による4種類の形がある。

「タ」については、多段型動詞では基幹音便形、一段型動詞では基幹(=語幹)、「来る」「する」ではイ段形「キ」、イ段由来のウ段形「ス」に「タ」を後接した形である。

- ・稽古もしないでぶっつけ書いた。(稽古もしないでぶっつけ本番で書いた。)(辞典・「ぶっつけ(げ)」)
- ・イズノマニガ サグラ ツッタハー。(いつの間にか桜がもう散った。)
- ・お前も見たべ。(お前も見たらろう。)(辞典・「べ」)
- ・柴ぶンナグッテ来た。(柴を刈り倒して来た。)(辞典・「ぶンナグル」)
- ・小枝を切りとって木をぼーゾコにした。(小枝を切りとって木を丸裸にした。)(辞典・「ぼーゾコ」)

「タ」の直前のラ行音は促音化する場合がある。

- ・[荒物屋には] きんなまであつたげんど、売り切った。(昨日まであつたけれども、売り切れた。)(武田5・「244 てんしつき」上山市)

「ツケ」は、断定非過去形に後接する。主に、話し手が体験した過去の出来事を表す。終助詞「ヨ」を後接する場合がある。

- ・ジョンズニ カグツケヨ。(上手に書いたよ。)
- ・チョーナイカイデ アノヒトバ ヨグ ミルツケ。(町内会であの人をよく見た。)
- ・タクスーカ° コゴサ クルツケヨ。(タクシーがここに来たよ。)

ただし「ツケ」が付いた形は、発話直前に話し手が体験した過去の出来事に基づいて、これから起こると話し手に認識されている出来事を表す場合がある(竹田 2004)。

- ・[こちらへ向かっている姿を道中の車の中から見かけたので] ツトムモ スグ クルツケ。(努もすぐ来るよ。)

「タ」に「ツケ」が付き、過去の出来事について

の話し手の認識を述べる。

- ・ムガスワ オレモ ニッキバ カイダツケ。
(昔は俺も日記を書いた。)
- ・サッキ サトーサンバ ミダツケ。(さっき佐藤さんを見た。)
- ・あるばんのことな。はて、なんだべなど、耳をすましていたら、だんだん近づいてきたけど。よっくど見たら、カップだけ。 (ある晩のことだ。はて、何だろうなど、耳をすましていたら、だんだん近づいて来たという。よく見たら、カップだったという。)(読み・「げんないとカップ」)
- ・また、ある日、和尚さまは、うまそうなまんじゅうをもらってきたので、さっそく、あみださまにおそなえしたけど。(また、ある日、和尚さまは、おいしそうな饅頭をもらってきたので、さっそく、阿弥陀様にお供えしたという。)(読み・「和尚と小僧」)

「カタ」は断定非過去形に付き、過去の習慣を表す(竹田 2004)。ただし、若年層ではほとんど使われず、連体用法がない。村山地方の北側の最上地方と南側の置賜地方では使われており、置賜地方の南陽市については金田(1984)に詳しい記述がある。

- ・この医者「阿呆目薬」はええ、やけはだの膏薬は跡残らねていうので、遠くから来つたものな。 (この医者の目薬は良い、火傷の膏薬は跡が残らないという評判で、遠くから買いに来たものだな。)(武田 9・「17 背の低い医者」)
- ・なんぼでも米よこすがつたずも。(いくらでも米を寄越したというもの。)(武田 9・「20 三上の延命地蔵」)

「タツタ」は現在の山形市では使われないが、山形市での過去の調査報告や、同じ村山地方の上山市や東根市では使用されたという記述がある。

- ・ヨンダツタベ (読んだだろう (完了・経験))
(対比・V5)
- ・むかしむかし、けちなお寺いだつたつて。(中略) 人ば困らせて喜んでいるお寺いだつたど。
(昔々、けちな和尚があったという。(中略) 人を困らせて喜んでいる和尚がいたそうだ。)(武田 5・「218 いじわる和尚」 上山市)

- ・神尾善兵衛という人は、「動物でさえも夫婦の情、親子の情はあるんだな」ていうことわかって、その日からぷつつり狩人やめてはあ、普通の百姓になつつたど。(神尾善兵衛という人は、「動物でさえも夫婦の情、親子の情があるのだな」ということがわかって、その日からきつぱり狩人を止めて もう、普通の百姓になつつたという。)(武田 6・「226 一つ目」 上山市)

状態動詞「居る」「ある」については、継続形と同様、過去と現在の両方に「ケ」「タ」を用い、現在か過去かは文脈によって判断される。

- ・オドーサンワ ニワサ イダヨ。(お父さんは庭に {いる/いた} よ。)
- ・イエノ マイサ ハシ アツケノヨ。(家の前に橋が {ある/あった} のよ。)(竹田 2004)

〈命令形〉

命令形では、多段型動詞はエ段形の「カケ」など、一段型動詞は基幹に「ロ」を付した「ミロ」など、「来る」は「コイ」、「する」は「スロ」となる。

- ・コゴサ ナマエバ カケ。(ここに名前を書け。)
- ・おれが、押えででけつから逃げろ。(俺が、押さええてやるから逃げて。)(羽前・「三枚のお札」 上山市)
- ・コッチバ ミロ。(こっちを見ろ。)
- ・ぐぐど来い。(急いで来い。)(辞典・「ぐぐど」)
- ・ミジ {ワガンナガツタラ/ワガンネドギ、デンワ シテケロ。(道がわからな {かつたら/ければ}、電話をしてくれ。)(竹田 2012)
- ・んだら、三人に縄つけてやつつから、早くたつつで来い。(それでは、三人に縄を付けてやるから、早く垂れて来い。)(羽前・「三枚のお札」 上山市)
- ・ぐんぐど仕事すろ。(急いで仕事しろ。)(辞典・「ぐんぐど」)

やや穏やかな命令表現があり、多段型動詞のア段形や「する」の基幹「サ」に「ッサイ/ッシャイ」、一段型動詞の基幹や「来る」の基幹「コ」に「ラッサイ/ラッシャイ」が付いた形がある。「呉れる」に「ラッサイ/ラッシャイ」が付いたケラッシャイは、単独で「ください」の意味で用いられるほか、テ形にケラッシャイが付いた形(〜てください)を作る。

- ・レーゾーコサ ビール ハイッテツカラ、イードギ ノマッサイ。(ビールが冷蔵庫に入っているから、飲みたかったら飲みなさい。)
- ・ベンキョーサツシャイ。(勉強しなさい。)
- ・ハヤグ コラツシャイ。(早く来なさい。)
- ・[卵を] もう一粒だけ、けらっしやい。(もう一個だけ、ください。)(羽前・「雀と猿」上山市)
- ・サギニ カイツテ ケラツシャイ。(先に帰ってください。)

現在の山形市では聞かれないが、上山市には「(ラ)ハレ/ (ラ) サレ/ (ラ) シャレ」が付いた形がある。

- ・三十銭で不服だら、おれ十五銭で引っ張んなだから、のらはれ。(人力車の貸し賃が三十銭で不服なら、それより安い十五銭で人力車を車夫が引っ張るのだから、お乗りなさい。)(武田 10・「6 旦那と小作」)

〈禁止形〉

「断定非過去形+ナ」が使われる。ラ行の場合、「ナ」の直前の「ル」は撥音化する。強調の終助詞「ナ」や「ズ」が付くことがある。

- ・コゴサ ペンデ カグナズ。(ここにペンで書くな。)
- ・わらじ作っどきは、「ハンクタでやめんな、必ず一足にしてやめろ」て言う(略)(わらじを作るときは半分で止めるな、必ず一足してから止めろ)と言う(略)(武田 9・「13 半足わらじ」)
- ・コッチ ミンナナ。(こちらを見るなよ。)
- ・コッチャ クンナナ。(こちらへ来るなよ。)
- ・ケンカ スンナズ。(ケンカをするな。)

〈意志形〉

「断定非過去形+ベ」が使われる。推量形と同形で、ラ行の場合、「ベ」の直前の「ル」は促音化または撥音化することがある。二人称・三人称の文では勧誘も表す。

- ・ダラダラステネデ、サッサト レポートバ カグベ。(だらだらしてないで、さっさとレポートを書こう。)
- ・木こりが山さ行って、木切んべと思った。(木こりが山へ行って、木を切ろうと思った。)

(武田 6・「234 山の神」上山市)

- ・キューケーステ テレビデモ {ミッベ/ミンベ}。(休憩してテレビでも見よう。)
- ・アスタ マタ {クッベ/クンベ}。(明日また来よう。)
- ・ヒサスブリニ サンボデモ {スッベ/スンベ}。(久しぶりに散歩でもしよう。)
- ・[若返りの水があるので] 帰りにあらくなくて柴いっぱい背負ってくんべと思って、みのと荷縄のふつといの持って、水飲んで帰り、柴背負ってくる勘定なんだ。(帰りに若返って強くなって柴をたくさん背負って来ようと思って、簀と太い荷縄を持って、水を飲んで、柴を背負ってくる心づもりなのだという。)(羽前・「若返り水」上山市)

上述のとおり断定非過去形が意志表現として用いられることもある。

〈推量形〉

「断定非過去形+ベ」が使われる。「断定過去形+ベ」で過去推量を表す。「ベ」の直前のルは促音化または撥音化することがある。「ベ」に終助詞「スタ」が付くことがある。

- ・オマイワ バーチャンサ テガミバ カグベ。(お前はおばあちゃんに手紙を書くだろう。)
- ・ソノ バングミ ダラ、ジローワ マチカ^o イナグ {ミッベ/ミンベ} ナ。(その番組なら、二郎は間違いなく見るだろうな。)
- ・ソダナニ キニ スネクテモ、ドーセ アイズワ アシタモ {クッベ/クンベ}。(そんなに気にしなくても、どうせあいつは明日も来るだろう。)
- ・ブンカサイダラ、ミンナ マチカ^o イナグ サンカ {スッベ/スンベ}。(文化祭なら、みんな間違いなく参加するだろう。)
- ・ナニ ユッテンダ バーチャン。トーチャンキンナ キタツケベスタ。(何を言っているんだ、おばあちゃん。お父さんは昨日来たじゃないか。)
- ・毎日、置賜のけしきばかり見えて、あきてすまもんださげ、山形のけしき見るべどて、登ってきたのっだな。(毎日、置賜の景色ばかり見えて、飽きてしまったものだから)

ら、山形の景色を見ようと思って、登って来たのだよ。)(読み・「山形のビッキと置賜のビッキ」)

〈連体非過去形〉

連体非過去形は、断定非過去形と同形である。

- ・[天狗が睨みつけるので] ははあ、おれば威嚇 すっどこだな。(なるほど、俺を威嚇するところだな。)(武田 5・「216 鎌倉権五郎と鎌倉えび」 上山市)

〈連体過去形〉

断定過去形のうち「タ」「タツケ」「ツケ」が連体過去形としても使われる。各形式の意味の違いは断定過去形と同様である。

- ・チョーナイカイデ ヨグ ミルツケヒトダ。(町内会でよく見た人だ。)
- ・コゴサ クルツケドギニ イヌバ ミダ。(ここに来るときに犬を見た。)
- ・カイズワ ハタケシコ° ドバ スルツケドギニ ツカッタ ドーク° ダ。(これは畑仕事をするときに使った道具だ。)
- ・山サ行ったケ日に会ったケ人。(山に行った日に会った人。)(辞典・「5860」)

〈中止形〉

「テ」が使われる。多段型は基幹音便形に、一段型は基幹に、「来る」は「キ」に、「する」は「ス」に、「テ」を後接する。

- ・トチューマデ カイデ ヤメダ。(途中まで書いて止めた。)
- ・キンナワ テレビバ ミデ ネダハ。(昨日はテレビを見て寝た。)
- ・イズモノ ミセサ キテ カイモノバ スツタドゴダ。(いつもの店に来て買い物をしているところだ。)
- ・サッサド シュクダイバ ステ コッチバテツダエー。(さっさと宿題をしてこっちを手伝え。)

〈仮定形〉

「ト」「タラ」「トキ」「(レ)バ」「コンタラ類」があり、「ト」「タラ」が最も基本的な形である(竹田 2012)。

「ト」は断定非過去形に付く。「タラ」は、多段型動詞では基幹音便形、一段型動詞では基幹、「来る」

ではイ段形「キ」、「する」ではイ段由来のウ段形「ス」に後接する。

- ・コガイニ フツラ、ミズブソグニナンテ ナンネベナ。(これだけ降れば、水不足にはならないだろう。)
- ・モット ハヤグ オギット イガッタ。(もっと早く起きればよかった。)
- ・コーリ {トゲツ/トゲダラ}、ミズニ ナル。(氷が溶けると、水になる。)
- ・キョー センタグ {スツ/スタラ}、アスタニワ カワグ。(今日洗濯すると、明日には乾く。)

「バ」は多段型動詞のエ段形に後接する。一段型動詞・「来る」「する」では「基幹+レバ」となる。従属節用法の仮説的用法や反事実的条件などで用いられる。

- ・アスタ アメ フレバ フネ デネベ。(あした雨が降れば、船は出ないだろう。)

「トキ」は断定非過去形に後接し、仮説的用法のうち前件と後件の時間的前後関係を表す場合を中心に用いられる。ニュアンスとして、「～する場合には」「～する気があるなら」に近い表現になる。

- ・[自分の本を読みたそうにしている友人に] ヨムドギア、カスヨ。(読むなら、貸すよ。)
 - ・クツドギ デルマエニ デンワケラッシャイ。(来るなら出かける前に電話をしてください)
- 「コンタラ類」は「コトナラ」に由来し、コンタラ/コッタラ/コンパなどの形が、共通語の「(の)なら」にあたる認識的条件文を中心に使われる。
- ・キョーノ ノミカイサ ヤマモドサン クルゴンタラ、オレモ イグガナ。(今日の飲み会、山本さんが来るなら、私も行こうかな。)

〈継起形〉

従属節の事態が起こると主節の事態が起こる、つまり継起的接続を表す専用形式として、「タツキヤ/タツケア」と「タレバ」が用いられる。多段型動詞の基幹音便形、一段型動詞の基幹、「来る」のイ段形「キ」、「する」のイウ段形「ス」に後接する。「タツキヤ/タツケア」は使わない話者もいる(竹田 2012)。

- ・ガッコーサ ツイダツキヤ、ニューカ° クスキワ オワツダ。(学校に着いてみたら、入学式は終わっていた。)

- ・おれ、なんだ人と一緒になっかって言うわけで、
うらないさ行ったらば、パッパッ算木いじぐ
っていたけあ、「はあ、お前は今夜生まれる
人と一緒になる」こういうふうをやっだんだ
ど。(俺がどんな人と結婚するかを知りたく
て、占いに行ったら、[占い師が] ばっばと
算木を使っていたところ、「そうだな、お前
は今夜生まれる人と結婚する」、このように
言われたのだという。)(羽前・「運定め話」
上山市)
- ・ほしてはいつ持って行って進めだれば、胸の
溜飲がおちるように、グゲー、グゲーとい
うたけあ、たちまち腹痛なおったんだど。(そ
してそれを持って行って献上したところ、胸
の溜飲が落ちるように、グゲーグゲーとい
ったと思ったところ、たちまち腹痛がなおっ
たんだそう。)(羽前・「運定め話」上山市)

〈否定形〉

多段型動詞はア段形に、一段型動詞は基幹に、「来る」は「コ」に、「する」は「ス」に、それぞれ「ネ」が付く。否定形自体は、形容詞と同じ活用をする。

- ・モー {ショーセツアテ/ショーセツナテ}
カガネ。(もう小説なんて書かない。)
 - ・[値段を聞いて] ソダイニ タガイゴントラ
カワネ。(そんなに高いなら、買わない。)(竹
田 2012)
 - ・サドーサン、コノコ° ロ ミネネ。(佐藤さん、
この頃見ないね。)
 - ・[火事だと言ったが]声低く出したから起きね。
(声を小さく出したので起きない。)(武田
5・「215 小僧持念」上山市)
 - ・オレワ アシタワ コネ。(俺は明日は来ない。)
 - ・リョーリワ サツパリ スネ。(料理は全然し
ない。)
- 「ケ」が動詞否定形に付くと、単純な過去を表す。
- ・クツペ ド オモツテダダゲント、イソガ
スクテ サツパリ コランネツケ。(来よう
と思っていたんだけど、忙しくてさっぱり
来られなかった。)
 - ・おまえ、珍しい人が来るから待ってろと言
ったけど、誰も来ネケジェ。(来なかった。)(渋
谷 2008・20)

〈丁寧形〉

断定非過去形に「ス」を付ける。「ス」は他のさま
ざまな活用形や終助詞にも付き、たとえば、「ノダ」
に付くと「ンダッス」、疑問の終助詞「カ」に付くと
「カッス/ガッス」、終助詞「ナ」や「ネ」に付くと
「ナッス」「ネッス」になる。ただし、「-ッシャイ」、
終助詞「ズ」、「ツタナ」、「ハ」などと共起しない。

- ・ソノ ショルイダラ オレカ° カグッス。
(その書類なら俺が書きます。)
- ・シャシン ミルッス。(写真を見ます。)
- ・ソロソロ バスカ° クルッス。(そろそろバ
スが来ます。)
- ・ソノ シゴドワ オレカ° スルッス。(その
仕事は俺がします。)
- ・ンダラ オレ カグナッス。(それでは俺が書
きますね。)
- ・[雀がほかの動物たちに訴えて]「たった三粒
しかない卵、猿にみたとらって泣いでいだん
だっす。(たった三個しかない卵を猿に全部
取られて泣いているのです。)(羽前・「雀と
猿」上山市)
- ・その若者がそこさ行って、ほして診察した。
「うん、先生さま、治つかず」(その若者が
そこへ行って、そうして診察した。「ねえ、
先生、治りますか」)(武田 5・「200 鼻高扇」
上山市)

〈使役形〉

多段型動詞はア段形に「セル/シエル」が使われ
る。一段型動詞は基幹に「サセル/サシエル」が付
く。「来る」は「コ」に「サセル/サシエル」が、「す
る」は「サ」に「セル/シエル」付く。使役形自体
は一段型動詞に準じた活用をする。

- ・アイズノ ホーカ° ジ ウマイガラ、ア
イズサ {カガセル/カガシエル}。(あいつ
のほうに字がうまいから、あいつに書かせ
る。)
- ・アツチカ° ツコ° ー ワレンナラ、コッ
チサ {コサセル/コサシエル}。(あつち
が都合が悪いなら、こっちに來させる。)
- ・ニガイノ ソージワ コドモダチサ {サセ
ル/サシエル}。(二階の掃除は子どもたちに
させる。)

〈受身形〉

多段型動詞はア段形に「レル」が付き、一段型動詞は基幹に「ラレル」が付く。「来る」は「コ」に「ラレル」が、「する」は「サ」に「レル」が付く。一段型動詞に準じた活用をする。後に「テ」「タ」「カ」などが付くときは、「カカレタ」「サレテ」などの「レ」が促音化する。たとえば一段型動詞「見られた」は「ミラッダ」、「来られた」は「コラッダ」、「された」は「サッダ」となる。多段型動詞では次のように「タ(ダ)」が促音化する。

書かれた：カガレタ>カガッダ

嗅がれた：カカ[°]レダ>カカ[°]ッダ

出された：ダサレタ>ダサッダ

立たれた：タダレタ>タダッダ

死なれた：シナレタ>シナッダ

飛ばれた：トバレタ>トバッダ

飲まれた：ノマレタ>ノマッダ

切られた：キラレタ>キラッダ

買われた：カワレタ>カワッダ

・[ゴミ置き場の] トー アケドクト、カラスニミナ カレレ。(戸を開けておくと、鳥に全部食われる。)

・ホntenナンダベガ。シンブンサ カガッタヨ。(本当なんだろうか？ 新聞に書かれているよ。)

・おれは、お母さまがなくなった時、このような鉢かぶせらった。(俺は、お母さまが亡くなった時に、このような鉢を被せられた。)
(羽前・「鉢かぶり姫」上市市)

・ハダケシコ[°] ド シッタラ、シャネウジニ トナリノ ヒトガラ ミラレダッダ。(畑仕事をしていたら、知らないうちに隣の人から見られていた。)

・イギナリ コラッダノヨー。タマケ[°] ダッダ。(いきなり訪問されたのよ。驚いた。)

・コダナ モノデワ バガニ サレッカモスンネ。(こんな物では馬鹿にされるかもしれない。)

・「あのような身分の低い女と、あまり親しくしね方がええんでないか」て、注意さっだんだど。(あのような身分の低い女と、あまり親しくしない方がよいのではないかと、注意

されたのだそうだ。)(羽前・「鉢かぶり姫」上市市)

・風がファッと吹いて来たけあ、和尚さんのしゃっぽ吹とばさった。(風がふわっと吹いてきたら、和尚さんの帽子が吹き飛ばされた。)(武田5・「207 和尚と小僧」上市市)

〈自発形〉

生産的な自発形がある(森山・渋谷 1988)。「カカル」「ミラル」「コラル」「スラル」などのように、多段型動詞のア段形に「ル」、一段型動詞の基幹、「来る」の「コ」、「スル」の「ス」に「ラル」が付いた形式が、「自然にその動作・変化が起こる」などの意味を表す。自発形自体は、多段型動詞と同様の活用型をとる。

・コノ ペン ヨグ カガル。(このペンは意外とインクが良く出る。)

・ヒトリダッタラ クララネケゲド、フタリダッダガラ コゴマデ コラタノッダナー。(一人だったら来なかったが、二人だったらここまで来たよなあ。)

・オレワ ヤキューズギダガラ、テレビデ チューケー ヤッテット、ツイ ミラル。(俺は野球好きだから、テレビで中継を遣っていると、つい見てしまう。)

・ジテンシャデ ハシッテットギ、プリウスッテ クルマワ シズガダガラヨ、ウッショニクット ケーカイスラル。(自転車走っている時、プリウスという車は静かなので、後ろに来ると警戒してしまう。)

・サイキン サッパリ テカ[°] ミアテ カガラネ。(最近ぜんぜん手紙なんて書かない。)

・イソガシクテ シンブンアテ サッパリ ミララネ。(忙しくて新聞などはぜんぜん見ない。)

・サイキン サッパリ ハダケスコ[°] ドアテ スララネモノー。(最近ぜんぜん畑仕事なんてしないもの。)

この「ル/ラル」はほかの地域ではあまり生産的ではないが、かつて周辺に広く分布していた可能性がある。山形県内や宮城県などには、「書カル」「貼ラル」などの動詞が語彙的にある。

〈可能(肯定・否定)形〉

肯定形は、「カグイ」「ミルイ」「クルイ」「スルイ」のように、「断定非過去形+イ」が用いられる。「イ」は形容詞「良い」に由来するが、この形が「カグイグネ」などのように否定形になることはない。

肯定の場合、過去形は「カグイガッタ／カグイック」「ミルイガッタ／ミルイック」「クルイガッタ／クルイック」「スルイガッタ／スルイック」、推量形は「カグイベ」「ミルイベ」「クルイベ」「スルイベ」となる。

否定形は、「カガレネ」「ミラレネ」「コラレネ／クラレネ」「サレネ」のように、受身形の否定形と同形である。ただし、肯定形の「カガレル」「ミラレル」「コラレル／クラレル」「サレル」は、かなり標準語的な表現あるいは受身表現の意味になる。

能力可能と状況可能の区別はない。

- ・コノ ペンワ スラスラ カグイ。(このペンはすらすら書ける。)
- ・コリヤ イッパイ ノムイナ。(これはたくさん飲めるな。)
- ・キョーワ ユックリ テレビバ ミルイ。(今日はゆっくりテレビを見られる。)
- ・アシタ オラエサ クルイガ。(明日私の家に来られるか。)
- ・ソージ オワツタガラ ヤット ユックリベンキョー スルイ。(掃除が終わったから、やっとうちで勉強できる。)
- ・狐・狸のたぐいは、ただ手づかみするいそうだ。(狐や狸の類は、簡単に手づかみで〔獲物を〕獲ることができるそうだ。)(武田 5・「194 ホラ吹き」上山市)
- ・おらだ、琵琶ひいたり、笙を習ったり、鼓鳴らすから、お前合わせるいが。(私たちは琵琶を弾いたり、笙を習ったり、鼓を鳴らしたりするから、お前はそれに合わせられるか。)(羽前・「鉢かぶり姫」上山市)
- ・カワエくて行かれない。(恥ずかしくて行けない。)(辞典・「カワエ」)
- ・コッダイ イダクテワ、コノ ニモズ モダンネ。(こんなに痛くては、この荷物は持てない。)(竹田 2012)
- ・[頭から鉢が] どうしても取んねんだ。(どうしても取れないのだ。)(羽前・「鉢かぶり姫」

上山市)

- ・モノゴクテかんネ。(味がしつこくて食われないう。)(辞典・「モノゴエ」)
- ・アンマリ モツコクテ サイゴマデ ミランネ。(あまりにかわいそうで最後まで見られない。)
- ・「たった三粒しかないから、けらんねつす」で言うたずま。(「たった三粒しかないから、あげられない」と言ったものだ。)(羽前・「雀と猿」上山市)
- ・コゴワ コージチューダガラ アッチカラワ {クランネ／コランネ}。(ここは工事中だからあっちからは来られない。)
- ・「ああ、死ぬこともさんね」て、しくしく泣いたんだ。(「ああ、死ぬこともできない」と、シクシク泣いていたのだそうだ。)(羽前・「鉢かぶり姫」上山市)

〈尊敬形〉

敬語は全般に不活発だが、「来る」「いる」に尊敬形「ゴザル」がある。現代では定型化したあいさつで用いられることが多い。

- ・ヨグ ゴザッタ。(よくいらっしゃった。)
- ・ヨグ ゴザッタナッス。(よくいらっしゃいました。)
- ・オラエサモ {ゴザラッシャイ／ゴザッシャイ}。(我が家にもいらっしゃい。)
- ・[あなた様は] ウタツさまで、ござったったかす。(龍様でいらっしゃいましたか。)(武田 10・「21 こたつの由来」上山市)

周辺周辺地域には「オ〜ナル」の記述があるが、現在の山形市ではあまり盛んではない。

- ・現在はちょっと品切れだから、明日お出なっていただかんねべか。(今はちょっと品切れだから、明日おいでになっていただけないだろうか。)(武田 5・「194 ホラ吹き」上山市)

〈継続形〉

継続形は「ている」「ていた」に由来する「テル」「テタ(ツダ／ツタ)」が後接した形を用いる。多段型動詞では基幹音便形、一段型動詞では基幹、「来る」ではイ段形「キ」、「する」ではイ段由来のウ段形「ス」に付く。

「テル」は、否定の場合は「カイデネ」「ミデネ」

「キテネ」「ステネ」、推量の場合は「カidelベ」「ミdelベ」「キテルベ」「ステルベ」などとなる。

「テタ」は「テ」が促音化した「ツダ／ツタ」が用いられる。一段型動詞「見ていた」は「ミツタ」、「来ていた」は「キツタ」、「していた」は「スツタ」となる。多段型動詞では次のように「テ（デ）」が促音化する。

書いていた：カideタ＞カideツダ

嗅いでいた：カideダ＞カideツダ

出していた：ダシテタ＞ダシツダ

立っていた：タツテタ＞タツテダ＞タツタ

死んでいた：シンデタ＞シンツダ

飛んでいた：トンデタ＞トンツダ

飲んでいた：ノンデタ＞ノンツダ

切っていた：キツテタ＞キツダ

買っていた：カツテタ＞カツダ

過去と現在の出来事を表す場合にも「ツタ／ツダ」を用い、現在か過去かは文脈によって判断される。ただし、例えば「テル」と「ツタ／ツダ」を比べると、「テル」は共通語的な形である。

- ・ジローナラ テカ° ミ {カidel／カideツダ}。(二郎なら手紙を書いている／書いていた。)
- ・イマ シューチューシテ カideツダ。ジャマスネデ ケロ。(今集中して書いてる。邪魔しないでくれ。)
- ・シャネ ヒドカ° ズット コツチバ {ミdel／ミツダ}。(知らない人がずっとこっちを見ている／見ていた。)
- ・キンナワ ズット テレビバ ミツダ。(昨日はずっとテレビを見ていた。)
- ・オドーサンワ モー ヤマカ° ダマデ クルマデ キツダ。(お父さんはもう山形まで車で{来ている／来ていた}。)
- ・ジローナラ キノーガラ イエサ キツタヨ。(二郎なら昨日から家に来ているよ。)
- ・ジローワ サッキワ ベンキョー シツタ。(二郎はさっき勉強して{いる／いた}。)
- ・おれあ、約束しつたんだぞ。(俺は約束していたのだ。)(武田5・「196 河童釣り」上市市)
- ・赤い札は「火の山出る」と言うど、火の山が出て、ぼんぼん燃えつた火の山出る。(赤い

札は「火の山出る」と言うど、火の山が出て、ぼんぼん燃えている火の山が出る。)(羽前・「三枚のお札」上市市)

- ・そして見物しつた人も武家の人もぶつたまげてしまつてはあ。(そして見物していた人も武家の人も驚いてしまつてもう。)(羽前・「鉢かぶり姫」上市市)

使役の継続形の場合、例えば「カカレテイタ」のイが脱落、レとテが促音化して「カカツタ」のようになる。継続形に「カツタ」が付くこともあり、この場合は過去のみを表す。

- ・[娘を食おうとしたが沼神からの手紙を読んで] 何だ、今すぐ食べられぬのが。なんだ金子なの持たせてやれて書かつた。(何だ、今すぐ食べられないのか。なんだ、金子などを娘に持たせてやれと書かれている。)(武田10・「6 沼神の手紙」)
- ・[石に綱を付けておいたら] 次の日、ほの綱はボロボロになつていつかつたど。「おかし、おかしい」と思つて、ほだごどまた考えて次の日行つて、つうと引張つて綱つけたまますつど、またボロボロになつていつかつたつて。(次の日、その綱はボロボロになつていたという。「おかしい、おかしい」と思つて、そんなことをまた考えて次の日に行つて、少し引張つて綱をつけたままにしておいたら、またボロボロになつていたという。)(武田9・「20 三上の延命地蔵」)

〈希望形〉

希望形では断定非過去形に「ダイ」がついた形が用いられる。「ダイ」は形容詞型の活用をする。ラ行の動詞に付くときは語末のルが促音化して「キツダイ(切る)」「クツダイ(来る)」などの形になる。

- ・コドシコソワ チャント ニッキバ カグダイ。(今年こそはちゃんと日記を書きたい。)
- ・ソダイニ オモツシャイ {ホンダラ／ホンダゴントラ}、オレモ ヨムダイ。(そんなにおもしろい本なら、おれも読みたい。)(竹田2012)
- ・ハヤグ アウダイ。チョット クーダイ。(早く会いたい。ちょっと食いたい。)
- ・ライシューモ テズダイサ イク° ダイ。(来

週も手伝いに行きたい。)

- ・ドラマノ ツズギカ° ミッダイ。(ドラマの続きが見たい。)
- ・ライシューモ テズダイサ クッダイ。(来週も手伝いに来たい。)
- ・チェトバリデ イーガラ ハナシバ スッダイ。(少しだけでいいから話がしたい。)
- ・ある若者が、正月すっだいと思っても、正月に何かえ食うものもない。(ある若者が正月の準備をしたいと思っても、正月に何かと食うものもない。)(武田6・「196 河童釣り」上山市)
- ・[石の意志について] その石は元のどごに居っだい石だから、元のどごさ返せ。(その石は元の場所にありたい石だから元の場所に返せ。)(武田9・「20 三上の延命地藏」上山市)
- ・ソカ° イニ {シズガダラ/シズガダゴントラ}、オレモ スンデミッダイ。(そこがそんなに静かなら、おれも住んでみたい。)(竹田2012)

〈のだ形〉

「のだ」相当の形式として「ノダ/ナダ」があり、連体非過去形に接続する。断定過去形にも接続して「たのだ」相当の形を作ることができる。「ナダ」は、名詞述語に準じた活用をする。

- ・コゴサ ジブンノ ナマエバ {カグノダ/カグナダ}。(ここに自分の名前を書くのだ。)
- ・コノ カワノ ミズワ ガッサンガラ {クルノダ/クルナダ}。(この川の水は月山から来るのだ。)
- ・アノ トジワ チューシャジョーサ {スンノダ/スンナダ} ド。(あの土地は駐車場にするのだと。)
- ・コダイニ {サムガッタラ/サムイゴントラ}、コート {キテクノダッタ/キテクナダッタ}。(こんなに寒いなら、コートを着て来るんだった。)(竹田2012・改)
- ・ナシテ コダナ ユメバ {ミンノダベ/ミンナダベ}。(どうしてこんな夢を見るのだろう?)
- ・なしてお前、ほだなものかぶって歩いていんなだか。(どうしてお前は、そんな物を被っ

て歩いているのだ。)(羽前・「鉢かぶり姫」上山市)

- ・椎茸の上さ、また字ふつついているなだ。悲しい茸で言うなだ。(椎茸の上に、また字が食いついているのだ。悲しい茸と言うのだ。)(武田5・「210 小僧持念」上山市)
- ・[へらで] かましているうちに一粒が何万倍でなんなだ。(かき回しているうちに一粒の米が何万倍に増えるのだ。)(武田5・「198 へらへら話」上山市)
- ・おらえではええことあんなだな。(我が家では良いことがあるのだな。)(武田5・「204 小僧持念」上山市)

「ノ/ナ」は「もの」に由来すると思われる。次のように、共通語の準体助詞「の」と同様に、名詞句を作る場合もある。

- ・カミダナサ アケ° ッタノ、サゲドゲ。(神棚に上げておいたもの[を]、下げておけ。)
- ・江戸の業者と、女河童とにかく捕えてお上げすっからて言うこと約束しつたな、これあ逃げらつたとあつては、おれあ男ぶりは下がるし、まず銭はないし、仕方ない。(江戸の業者と「女河童をとにかく捕らえて差し上げるから」ということを約束していたの、これが逃げられたとあつては、俺は男ぶりは下がるし、もう金はないし、仕方がない。)(武田5・「196 河童釣り」上山市)
- ・団子搗いて、ほして団子まるべて、はいつをお椀さあげつたな、トンと板の間さ落つた。(団子を搗いて、そうして団子を丸めて、それをお椀にあげたのが、トンと板の間に落ちた。)(武田5・「198 へらへら話」上山市)

〈なる形〉

断定非過去形に形容詞活用語尾「グ」(活用表では「ク」と表記)を介して「ナル」が直接付き、「その動作をするようになる」という意味を表す。「できるようになる」ではなく、その動作が半ば習慣になるという意味で使われる。過去のタとツケが付くことがある。否定形にはならない。

- ・オカ° ッタガラ ジバ カググナル。(大きくなったから字を書くようになる。)
- ・キニ ナッテ ショーミキケ° ンマデ ヨッ

クド ミルグナル。(気になって、賞味期限までもよく見るようになる。)

- ・メンキョバ トッタガラ ヒトリデ クルグナル。(免許を取ったから一人で来るようになる。)
- ・サイキンデワ ベンキョーモ ヒトリデ スルグナル。(最近は勉強も一人でするようになる。)
- ・オカ[°] ッタガラ ジバ {カググナッタ/カググナッタツケ}。(大きくなったから本を書くようになった。)

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

形容詞の活用型は1つである。形容詞を派生する接尾辞として、「コイ/コエ」、「タイ/タエ」、「ナイ/ナエ」、「ポイ/ポエ」などがある。

なお、調査語「アガイ」は、古くは「明るい、美しい、赤い」を表した。

〈断定非過去形〉

断定非過去形は連体非過去形と同形で、以下のように用いられる。

- ・キモノ アガエ。(着物が美しい。)(辞典・「アガエ」を改)
- ・こっちの方がウガエ。(こっちの方が多い。)(辞典・「ウガエ」)
- ・この肴はシマエ。(この肴はおいしい。)(辞典・「シマエ」)
- ・盆栽枯らしてエダマシイ。(盆栽を枯れさせて惜しい。)(辞典・「エダマシイ」)
- ・あのお寺の裏はキビワレエ。(あの寺の裏は気味が悪い。)(辞典・「キビワレエ」)

〈断定過去形〉

形容詞の断定過去形として、語幹に動詞的活用の音便基幹「カッ」に「タ」や「ケ」を後接した形と、断定非過去形に「カッタ」が付いた形がある。

「ケ」は、動詞の場合と同様に、話し手の認識を表す形式である。「タ」は、若年層にとっては共通語的であるという。

- ・[旅行から帰ってきて]アノ サグラワ トテモ {ウズグスイツケ/ウズグスガッタ}。(あの桜はとても美しかった。)

- ・いや、おれわれがった。(いやはや、俺が悪かった。)(武田5・「209 殿さまとあくび」上山市)

断定非過去形に「カッタ」が付いた形がある。「カッタ」は、動詞のように「過去の習慣」ではなく、単なる過去を表す。若年層はほとんど使わない。

- ・洞くつの中の金のぼんだらも何ばいも大きく、またすばらしいがったんだ。(洞窟の中の金のつららの何倍も大きく、またすばらしいのだそうだ。)(羽前・「夢の蜂」上山市)

- ・[獲り猟師の早業について]キジはそういう風にして獲るが、山兔の後足、ちょいつつかまえるぐらい早いがた。(キジはそういう風にして捕るが、山兔の後ろ足を、ちょっとつかむくらいに早かった。)(武田5「193 ホラ吹き大会」上山市)

- ・[今日は]いや、天気ええくて、ええがた。(いやはや、天気が良くて、良かった。)(武田5・「199 鼻高の呪文」上山市)

- ・[火事の知らせの練習をして]いや、まず、どのぐらいでええか分んねくて、あとでまた低いがたの、高いがたのて、ごしゃがれっどなんねから、ちょえつと練習してみたんだ。(いえ、まあ、どのくらいの大声で言えば良いかわからなくて、後で再び声が低かったとか高かったとか叱られるといけないから、ちょっと練習してみたのだ。)(武田5・「217 小僧持念」上山市)

- ・笑わせてみだいて、みんな考えていたげんど、一言も笑ったことないがたて。(笑わせてみたいと皆が考えていたが、一度も笑ったことがなかったという。)(武田10・「25 まえたけ」上山市)

〈推量形〉

動詞と同様に「ベ」が用いられ、断定形に付く。「ベ」は過去形にも付く。終助詞「シタ」「ズ」が後接することがある。

- ・コノ ママ モツテタンデワ カーチャンニ {ワルイ/ワレ} べ。(このまま持って行くのではお母さんに悪いだろう。)
- ・[旅行から帰宅した人に]サッポロワ {サムイツケ/サムガッタ} べ。(札幌は寒かった)

だろう。)

- ・センダイアテ ホッダイ サムグナイベ。(仙台なんてそんなに寒くないだろう。)
- ・アノ ヒトワ コダナノ カネベシタ。(あの人はこんな物を食わないだろうよ。)
- ・おれ、どうしたらええべ。(俺はどうしたら良いだろう。)(羽前・「鉢かつぎ姫」上山市)

山形市の周辺部では、「べ」は語幹+動詞的活用の音便形「カン」に付いた形がある。

- ・[扇の使い方]で何試してみたらええがんべなあ。(何を試してみたら良いだろうなあ。)(武田5・「200 鼻高扇」上山市)

〈連体非過去形〉

連体非過去形は断定非過去形と同形である。

- ・アガイ キモノ。(赤い/美しい着物)
- ・ウガイ ミジ。(遠い道)
- ・ンマイ サガナダ。(おいしい肴だ。)
- ・若衆に似合わねで、うまいこと知ってるな。(若衆に似合わず、うまいことを知っているな。)(武田5・「206 鴨うち」上山市)
- ・セワシー人だ。(落ち着いたきのない人だ。)(辞典・「セワシイ」)
- ・シンジョーワ サムイドゴダナー。(新庄は寒いところだなあ。)
- ・ソツダナ コバクセーゴド サンネツダナー。(そんなばかりさいことはできないぞ。)

〈連体過去形〉

連体過去形として終止過去形と同形の「タ」「ツケ」が次のように使われる。「カッタ」の連体用法はないようである。

- ・ムガシワ {アガイツケ/アガガッタ} クルマデヨー、メダツテダ。(昔は赤かった車でね、目立っていた。)

〈中止形〉

語幹に「クテ」を後接した形がある。

- ・この服ぎツツクテ着らんえ。(この服はきつくて着られない。)(辞典・「ぎツツイ」)
- ・じんつあが毎日山さ芝刈りに行っただ、ほしてその日に限って、あんまりかせいだんで、あたくてあたくてなんねから、どっかに水でもないべかと思って、たねっだれば、小さな岩の間から冷たい水がコロコロ、コロコロ

という音出して流っでいんだけど。(じいさんが毎日山へ芝刈りに行ったというもので、そしてその日に限って、とても働いたので、暑くて暑くてならないので、どこかに水でもないだろうかと思って、探していたら、小さな岩の間から冷たい水がコロコロコロコロという音を出して流れていたのだという。)(羽前・「若返り水」上山市)

〈仮定形〉

断定形に付く「ト」「トキ」「コンタラ類」と、動詞的な接辞「カッ」に「タラ」が続く形、「ク」に「テワ」が続く形があり、動詞と同様、「ト」「タラ」が最も基本的な形である(竹田2012)。

- ・モット ヤスイド イーノニ。(もっと安ければいいのに。)
- ・サムイドギ ストーブバ ツケロナ。(寒かったらストーブを点けるな。)
- ・アシタ ナミ タガガッタラ、フネア デネベナー。(あした波が高ければ、船は出ないだろうな。)
- ・コガイニ {サムガッタラ/サムイゴントラ}、コート キテクンナダッタ。(こんなに寒いなら、コートを着て来るんだった。)

〈否定形〉

語幹に「ク」をつけ「ナイ/ナエ/ネ(一)」を後接した形になる。

- ・[トマトは] マダ アガグナイナ。(まだ赤くないな。)
- ・サツバリ エだマズグナエ。(ちっとも惜しくない。)(辞典・「エだマズグナエ」改)

〈なる形〉

語幹に「ク」をつけて「ナル」を後接した形になる。「ク」を付した形は、他の動詞の副詞的修飾形としても使われる。

- ・ナミキカ° アガグナル。(並木が紅葉する。)
- ・オーキグナツテ コノ フグワ ギツツグナツタ。(大きくなってこの服はきつくなった。)
- ・小包のひもぎツツぐしばれ。(小包の紐をきつく縛れ。)(辞典・「ぎツツイ」)

〈丁寧形〉

動詞と同様、断定非過去形に「ス」を付けた形が使われる。スヨ/ヨッス、スネ/ネッスや、ケッス、

バスのように前後に「ス」が付くことがある。

- ・盆栽枯らしてエダマシイス。(盆栽を枯れさせて惜しいです。)(辞典・「エダマシイを改)
- ・センサー ソドワ カゼ ツヨイスヨ。ジカンマデ ユックリ シテッテケラッシャイ。(先生、外は風が強いですよ。時間までゆっくりしてってください。)
- ・キョーワ キンナヨリ サムイクセス。(今日は昨日より寒かったです。)
- ・先輩、いま、外に行かないほうがいいバス。(先輩、いま、外に行かない方がいいですよ。)(渋谷 2004・48)

〈のだ形〉

連体形に「ノダ/ナダ」を後接した形になる。共通語のノダとは少し異なり、共通語に訳すと「物だ」「ことだ」というような意味を表す場合がある。

- ・ナンダガ ワガラナイケド、アソゴサ アンナ {アガイノダ/アガイナダ}。(何だかわからないけど、あそこにあるのは赤い物体だ。)
- ・キョーワ キンナヨリ {サムイノダー/サムイナダー}。(今日は昨日より寒いことだ。)
- ・何持ってくつどええなだべ。(何を持ってくると良いのだろう。)(武田 5・「194 ホラ吹き」上山市)
- ・この米一粒入って、このぐらい大きい釜さ水、みんなして汲んでけっから、ほいつお前炊いでけつどええなだ。(この米を一粒入れて、このぐらい大きな釜に水を皆で汲んでやるから、そいつをお前が炊いてくれれば良いのだ。)(武田 5・「198 へらへら話」上山市)
- ・まあ農具のふるな、みんなけでやる。(もう農具の古い物は、みんなくれてやる。)(武田 5・「211 けちん坊」上山市)

【形容名詞述語・名詞述語】

和語の形容名詞はあまり存在せず、辞書類にも殆ど記載がない。たとえば「シズガダ」は共通語として使うという内省が得られ、「シズガダ」の代わりに「ヤガマスグナイ」が回答され、1940年頃の調査報告(小林好日による東北方言通信調査)でも同様の回答が多い。名詞述語にはこのような問題はない。

〈断定非過去形〉

形容名詞述語、名詞述語とも断定非過去形は形容名詞・名詞に「ダ」が付いた形になる。

- ・アノ ヒトワ スンセズダ。(あの人は親切だ。)
- ・あれはジャイアントロボの人形だジェ。(あれはジャイアントロボの人形だよ。)(渋谷 2008・13の改)
- ・あした雨だジェ。(明日は雨だよ。)(渋谷 2008・16の改)

〈断定過去形〉

形容名詞述語・名詞述語とも断定過去形は、「ダッタ」「ダッケ」の形になる。

- ・アノ ヒトワ {スンセズダッタ/スンセズダッケ} ナー。(あの人は親切だった。)
- ・昨日は休みだケ。(昨日は休みだった)(辞典・「ケ」)

〈推量形〉

動詞・形容詞と同様、「断定形+べ」が用いられる。

- ・タブン アノ ヒトワ スンセズダべ。(多分あの人は親切だろう。)
- ・夕方になって、「今度、来る頃だべなあ」て、しびれ切らして、皆して百足さんの家さ行ったら、まだ出掛けねでいだっけ。(夕方になって、「そろそろ来る頃だろうな」と思ったが、待ちかねて皆でムカデさんの家に行ったら、まだ出かけずに家にいた。)(武田 5・「205 百足の医者迎え」上山市)
- ・タブン アノ ヒトワ {スンセズダッタべ/スンセズダッケべ}。(多分あの人は親切だっただろう。)

〈連体非過去形〉

形容名詞述語の連体非過去形では「ナ」が付く形が用いられる。

- ・アノ ヒトワ スンセズナヒトダ。(あの人は親切な人だ。)

名詞述語では、助詞「ノ」を付す。

〈連体過去形〉

形容名詞述語・名詞述語とも、連体過去形は、断定過去形と同じ「ダッタ」「ダッケ」の形になる。

- ・ムガシ {ガッコーダッタ/ガッコーダッケ} ドゴサヨー、コンド コーミンカンカ[°]デ(ギ)ンダド。(昔学校だった所ね、今度公民館ができるんだって。)

〈中止形〉

「デ」を後接した形になる。

- ・アノ ヒトワヨ、スコク スンセズデ ヨ、オレ イッタドギモヨ、ズブンデ ハゴンデ キテクレダノヨ。(あの人はね、とても親切な人でね、私が行った時もね、自分で運んできてくれたのよ。)
- ・ホノドギ オレワ マダ ガクセーデ ヨ、タイヘンダッタノヨ。(その時私はマダ学生でね、大変だったのよ。)

〈假定形〉

「断定非過去形ダ+ト」「ダッタラ」「ダ+コンタラ類」「デワ」「連体非過去形ナ・ノ+トキ」が用いられる。「断定非過去形ダ+ト」「ダッタラ」「ダ+コンタラ類」「デワ」「連体非過去形ナ・ノ+トキ」が用いられる。動詞と同様、「ト」「タラ」が最も基本的な形である(竹田 2012)。

- ・[これから会う人が] スンセツダド イーナ。(親切だと良いなあ。)
- ・[話題の人が] スンセツダラ オレサモ オセロ。(親切なら俺にも教えて。)
- ・アド チェットバリ スンセツダッタラ イウゴド ネーダゲドモナー。(あと少しだけ親切なら、言うことはないんだけどなあ。)
- ・コダイニ {スンセツデワ/スンセツダド} カエッテ スンパイニナルナ。(こんなに親切だと却って心配になるなあ。)
- ・ナニモ イマデナグテモ イービャー。ミナ ゲンキナドギ タメセバ イービャー。(何も今でなくても良いだろう。皆が元気な時に試せば良いだろう。)
- ・ミセノヒト コダイニ スンセツダゴンタラ ハヤルノモ トウゼンダベシタネー。(店の人がこんなに親切なら流行るのも当然だろうねえ。)
- ・アスタモ スゴダダド クルマデ インノダナー。(明日も仕事なら車で行くのだなあ。)
- ・アスタ スゴダダラ ショーガネベシタ。(明日が仕事なら仕方ないじゃないか。)
- ・オマエ スゴドノドギ オレガ ムガイサイクヨ。(お前が仕事なら私が迎えに行く

よ。)

- ・モシ アシタ スゴダゴンタラ オレガ ルスバン スルビャー/スルベハー。(もし明日が仕事なら私が留守番をしよう。)

〈否定形〉

「デナイ」あるいは「ジャナイ」を後接した形が用いられる。

- ・[店の評判について尋ねられて] サッパリ スンセツデナイ ヨ。(ぜんぜん親切じゃないよ。)
 - ・みんな悪口すつけんども、ほどえ悪れ者でない。(みなは悪口を言うけれども、そんな悪者ではない。)(武田 5・「211 けちん坊」上山市)
 - ・[あの人は親切な人ですか?と聞かれて] イヤ、スンセツデワナイ ナー。(いや、親切ではないなあ。)
 - ・(近所の更地に何があったかについて) ガッコーガ? イヤ、ガッコー {デワ/ジャ} {ナガッタ/ナイッケ/ネーッケ} ナー。(学校か? いや、学校ではなかったなあ。)
- 名詞述語では、名詞に「ンネ」を後接した形も使われる。
- ・ジローワ ガクセーネ。(二郎は学生ではない。)
 - ・もしかしたら二郎はまだ学生ンネガ。(学生ではないか。)(渋谷 2001 の 6)

〈なる形〉

「ニナル」を後接した形になる。

- ・[前に比べると] ズイブン スズガニナッタ ヨ。(ずいぶん静かになったぞ。)
- ・ハルニ ジローワ ダイガクセーニナル。(春に二郎は大学生になる。)

〈丁寧形〉

「断定非過去形ダ+ッス」が用いられる。動詞や形容詞と同様に、終助詞などに「ッス」が後接することもある。

- ・アノヒトワ シンセツダガッス。(あの人は、親切ですか。)
- ・アノヒトワ シンセツダッス。(あの人は親切です。)
- ・アノヒトワ シンセツダナッス。(あの人は親

切ですぬ。)

〈のだ形〉

「のだ」相当の形式として「ナノダ」「ナダ」がある。過去のタヤケが後接する場合がある。

- ・コツツノ ヘヤワ ヒルマデモ {マックラ
ナノダ/マックラナダ}。(こっちの部屋は昼間でも真っ暗なのだ。)
- ・オラエノ アネサ ハエッタ コーバデ エ
ヅンダテ ユートーシェーデヨ ヤッパリ
ニバンドガ エヅバンドガ ホレ サンバ
ントガテナレ ヤッパリ ジョーヅナダケ
ナ。(俺家の 姉さん [が] 勤めている 工
場で いつでも 優等生でよ やっぱり
二番とか 一番とか ほら 三番とかにな
ってな やっぱり 上手だったんだな。)(談
話・1903年生女性)
- ・アダナ ワガヅニスル シトン^ハダハゲダガ
ナエダガ エドカ^カ ホレー フットエ
ホッソエ ナクテ タエーラナダケド。(あ
んな 若死にする 人だったからか どう
か 糸が ほら 太い 細い [が] なくて
均質なんだったそうだ。)(談話・1903年生女
性)
- ・ホーユー ウンドーバリ シテッサゲ ジョ
ーブンナダベナエー。(そういう 運動ばか
り してるから 丈夫なんだろうな。)(談
話・1914生男性)
- ・ジローワ マダ {ガクセーナノダ/ガクセ
ーナダ}。(二郎はまだ学生なのだ。)

用例出典

羽前：武田正編（1973）『日本の昔話 4—羽前の昔話—』日本放送出版協会

辞典：山形県方言研究会編（1970）『山形県方言辞典』（山形県方言研究会）

渋谷 2001：渋谷勝己（2001）「山形市方言における確認要求表現とその周辺」『阪大社会言語学研究ノート』3

渋谷 2004：渋谷勝己（2004）「山形市方言の文末詞パーヨと対比して」『阪大社会言語学研究ノート』6

渋谷 2008：渋谷勝己（2008）「山形市方言の文末詞

ジェーヨ・ズ・バと対比して—」『阪大社会言語学研究ノート』8

談話：国立国語研究所（1978）『国立国語研究所資料集 10 方言談話資料（1）—山形・群馬・長野—』から、山形県西村山郡河北町谷地の1903年生女性と1914生男性の発話を参照した。

対比：「全国方言の対比的研究」報告票（国立国語研究所所蔵の調査票による。1967年の調査で、調査地点は山形県山形市岩波、調査者は佐藤亮一氏）
竹田 2004：竹田晃子（2004）「山形市方言におけるテンス・アスペクトと文末形式ケ」『国語学研究』43

竹田 2012：竹田晃子（2012）「山形県米沢市方言・山形市方言における条件表現の研究」『大正大学研究紀要』97

武田 4：武田正編（1973.05）『日本の昔話 4—羽前の昔話—』日本放送出版協会

武田 5：武田正編（1973.07）『佐藤家の昔話 5—へらへら話—』（私家版）

武田 6：武田正編（1973）『佐藤家の昔話 6—夢のほたる—』（私家版）

武田 9：武田正編（1975）『佐藤家の昔話 9—おとぎり草—』（私家版）

武田 10：武田正編（1976）『佐藤家の昔話 10—ゆき女—』（私家版）

武田 11：武田正編（1976）『佐藤家の昔話 11—ねずみの角力とり—』（私家版）

森山：森山卓郎・渋谷勝己（1988）「いわゆる自発について—山形市方言を中心に—」『国語学』152

読み：山形とんと昔の会・山形県国語教育研究会編著（2005）『読みがたり—山形のむかし話—』日本標準

参考文献(用例出典と重なるものは略)

飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編（1982）『講座方言学 4—北海道・東北の方言—』国書刊行会

金田章弘（1984）「山形方言の動詞のテンス—スッカッタ形とその周辺—」『国文学解釈と鑑賞』49-1

武田正編（1973.07）『佐藤家の昔話 5—へらへら話—』（私家版）

武田正編（1976）『佐藤家の昔話 10—ゆき女—』（私家版）

平山輝男（1944）「東北方言のアクセント」「東北方
言の音調」小林好日編著『東北方言の研究』
山形県方言研究会編（1972）『山形県方言概説』栄文
堂書店

（竹田晃子・澤村美幸）